

日本におけるキリスト教の歩み

その4 鎖国から開国&信徒発見-1

江戸時代

鎖国
~
1
8
5
4

1658年大村藩の郡村崩れを発端に仏教化推進が始まり同時にキリシタン狩りが過激化。豊後、尾張の美濃のキリシタン迫害、殉教者は数千人で1773年頃迄続いた。この事件を知った長崎の外海地域の信者たちは、1798年頃に五島へ潜伏離住した。一方、1708年フィリピンから密かにスペイン船で屋久島へシドゥッティ神父が潜入したが、敢え無く捉えられ、長崎へ送還、そして江戸で取調べられ幽閉、1714年帰天。その後ローマからの救いの手はなかった。18世紀の半頃、漸くローマは中国で宣教していたパリ外国宣教会に日本の潜伏キリシタンの為に協力を求めた。

アヘン戦争
1840年

1831年ローマは朝鮮に代牧区を設置する際、パリ外国宣教会 MEP に日本も視野に入れておく事を依頼した。しかし、日本におけるキリスト教迫害、殉教は殊の外激しくその道は困難であった。1840年中国がアヘン戦争で英国に敗北し状況が一転。マカオ、香港を拠点に再度日本への宣教を計画した。当時、中国と日本の支配下にあった琉球王国を日本への再渡来への入口とし、フォルカド神父を中国への宣教師と偽り忍ばせた。当初、彼は日本語の勉強と祈りで2年間過ごした。1846年教皇グレゴリオ16世は、彼を日本の最初の代牧に任命した。しかし、司教叙階の為香港に戻ったフォルカド神父は再び戻ることなくフランスへ帰っていった。1854年遂に、アメリカの黒船に乗船したペリーが来訪。ようやく固く閉じた日本の門戸が開いた。そして1858年ジラル神父が日本の布教長に任命され、もう一人プチジャン神父この二人の宣教師が那覇に入った。その際、合衆国やフランスとの条約で函館、横浜、長崎の港が開港。そこに外国人の居留地が設けられた。1859年ジラル神父は、フランス領事館の通訳として江戸の領事館に住んだ。一方、那覇ではプチジャン神父が日本語を勉強。その頃、七世代と引き継がれた長崎の潜伏キリシタンは、バスチャンの教えた言葉を唱え、山の上から港を見下ろしていた。

1854年
ペリー来航開国

熱心なプロテスタントの領事ハリスは条約締結時布教保証追記

1859年聖公会、長老会、改革教会の宣教師来日

信徒発見

1862年教皇ピオ9世は26人の殉教者を列聖。同年ジラル神父は、横浜に天主堂献堂するもキリシタンはいない。翌年フュレ神父は長崎の大浦に天主堂の建設を開始。しかし、病気になり彼に代わり当時まだ沖縄にいたプチジャン神父が1864年派遣された。同年26聖人殉教者に捧げられた天主堂完成。数ヶ月後の1865年3月17日、数人の浦上の農民が密かに天主堂を訪れた。プチジャン神父にそっと近づき「サンタ・マリア様のご像はどこですか」。この言葉は、驚き、喜び、感動を歴史に刻印した信徒発見の日となった。

ジラル神父布教長 MEP

1
8
6
8

早速プチジャン神父は、ジラル神父に報告。ジラル神父はローマに知らせた。当時まだ長崎での宣教活動は許可されていなかった。その為、密かに神父は浦上を訪れ信仰教育を始めた。発見されたキリシタンたちから伝道士を育て、潜伏キリシタンを導いた。その理由は当時まだ天主堂が居留者だけの為であり、潜伏キリシタンには禁じられていた。宣教師からの信仰の再教育を受けつつある潜伏キリシタンは、次第に仏式での葬儀を拒む様になり、また密かに集会を持っていたことが、奉行所の耳に入った。奉行所は、幕府に事の次第を報告。再び幕府は、キリシタンたちを捕らえ投獄した。

浦上崩れの始まり